

「京都市らしさ」を支える生物資源のうち特に重要と考えられる生物種

マツ（アカマツ）＜ハビタット＞ アカマツ林環境

「京都市らしさ」との関わり

祭事・
伝統行事

祇園祭、鞍馬火祭、五山の送り火、お正月、書初め、嵯峨お松明、花背松上げ、広河原松上げ、久多宮の町松上げ、小塩の上げ松、雲ヶ畑松上げ、小山の山の神 等

食

工芸品

京仏壇
京仏具
等

建築

伝統建築 等

造園

造園 等

生物資源の利用と調達状況の例



祇園祭

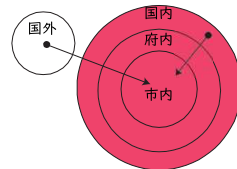
<現状>

- アカマツは現在も入手できているが、将来的に採取できるかは分からない。

容易 やや難 困難 不明

－入手難易度－

入手先



・京都産含め、国内産を利用



五山送り火

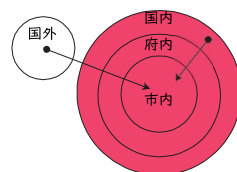
<現状>

- マツ枯れが進み、また山が荒れているため、入手が困難。現在、アカマツが生育していても衰弱した個体が多い。

容易 やや難 困難 不明

－入手難易度－

入手先



・京都産含め、国内産を利用



造園

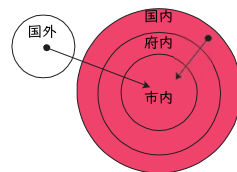
<現状>

- 市内調達が困難になり、府内外からも調達している。良質の材が入手困難。

容易 やや難 困難 不明

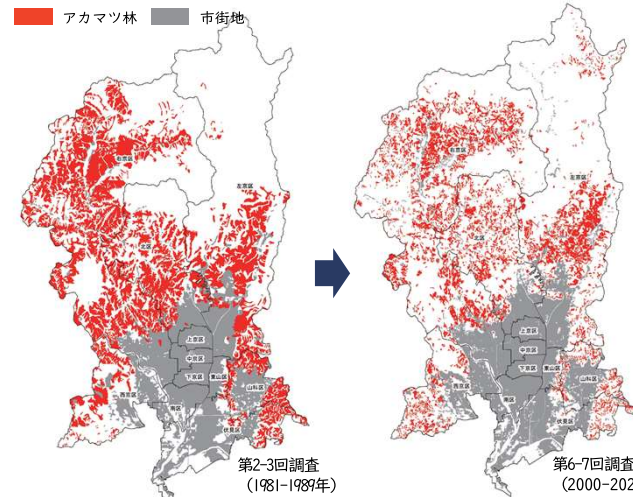
－入手難易度－

入手先

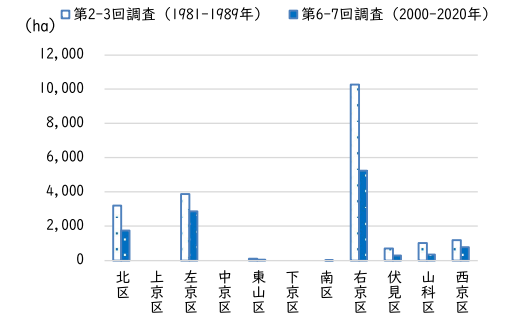


・京都産含め、国内産を利用

分布（資源）量の推移



アカマツ林面積の経年変化



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、アカマツ林の分布が大きく減少していることが分かる。特に、北区、左京区及び右京区における減少が顕著である。

出典：1/50,000及び1/25,000植生図「京都市」GISデータ（環境省生物多様性センター）を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害

衰弱したアカマツは台風などの気象害の影響を受けやすい。

獣害

担い手（管理）不足

アカマツ林の維持管理不足で病虫害の影響から枯死木が増加している。

外来種

都市化

環境の質の変化

京都のコバノミツバツツジアカマツ群集で過去・現在の類似地点の調査結果から種組成（環境の質）について比較した結果、出現種数の減少及び種組成の変化が見られ、アカマツ林特有のツツジ類が減少し、常緑広葉樹が優占する環境への変化が見られた。

■過去（宮脇 昭（1984）日本植生誌 [5]（近畿））

高木層：アカマツ
亜高木層：タムシバ、コナラ、コシアブラ、リョウブ、タカノツメ、ヤマウルシ、ソヨゴ等
低木層：コバノミツバツツジ、ネジキ、ナツハゼ、ウスギヨウラク、スノキ等のツツジ科低木、ヤマウルシ、リョウブ、タカノツメ、コシアブラ、クロモジ、ウリカエデ等の落葉広葉樹

■現在（大北山において実施している森林再生活動）

高木層：アカマツ
亜高木層：ソヨゴ、コジイ等
低木層：ネジキのほかコバノミツバツツジ等のツツジ類が僅かに生育
ヒサカキ、ソヨゴ等の常緑広葉樹が優占

「京都市らしさ」としての位置付け

指標種：アカマツ
ハビタット：アカマツ林



① 様々な構成要素（特に祭事・伝統行事）との関わりが深く、京都の伝統を継承していくには必要な生物資源。

② アカマツは生物多様性としての価値とともに、京都の森林景観として「京都市らしさ」を支える生物資源。



「京都らしさ」との関わり

祭事・
伝統行事

食

工芸品
染織

建築

造園

京料理 等

生物資源の利用と調達状況の例



京料理

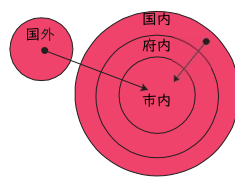
<現状>

- 維持管理されたアカマツ林面積の減少に伴い、マツタケが生育できる環境が減少している。

容易 やや難 困難 不明

－入手難易度－

入手先



・京都産含め、国内外産を利用

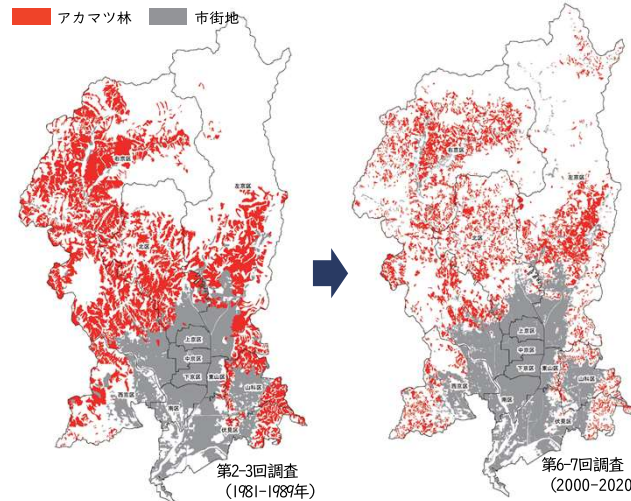
マツタケの分布と生態

マツタケはハラタケ目 キシメジ科に属する種で、京都府レッドデータブック 2015 では準絶滅危惧種として掲載されている。生態の特徴、必要な保全対策に記述されているとおり、西日本における食文化と関係が深かったこと、アカマツ林の管理不足等により減少したことが分かる。

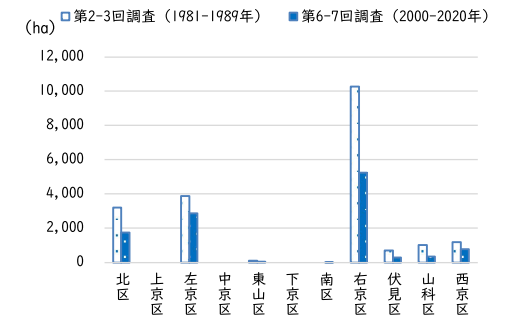
選定理由	京都府は主要な生産地であり発生していたが、近年激減してしまった。
形態	傘は径8～10（最大45）cm、初め半球体、のち中高の饅頭形となる。幼菌時は柄につば状被膜が残るが消失しやすい。肉は白色で堅い。柄は10～15cm×1.5～2cm。つば状被膜より上は白色、下部は傘表面と同様の茶褐色から黒褐色のささくれた鱗片がある。ヨーロッパ、北アメリカの <i>T. Caligatum</i> (Viv.) Rickenは同一種とも言われている。
分布	日本全土。岩手県、広島県の生産量が多い。（ <i>T. Caligatum</i> ：北アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、アルジェリア、朝鮮半島、中国大陸、モロッコ、台湾、チェコスロバキア）。 ◎府内の分布区域 1955～60年をピークとして減少、現在主産地は船井郡。
生態的特性	主にアカマツ、時にツガ、シラビソ、クロマツ、エゾマツ、稀にトドマツ林に発生する。昔は燃料用の落葉掻きでアカマツ林地は整地され、養分が少なくなり、マツタケ発生に好環境をつくっていた。
必要な保全対策	絶滅危惧種ではないが、西日本の食生活に深くかかわってきたキノコだけに、マツタケモドキやショウゲンジとともにアカマツ林を保護し、増やす方法を考える必要がある。山の手入れが必要である。

出典：京都府レッドデータブック 2015

分布（資源）量の推移



アカマツ林面積の経年変化



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、アカマツ林の分布が大きく減少していることが分かる。特に、北区、左京区及び右京区における減少が顕著である。

出典：1/50,000及び1/25,000植生図「京都府」GISデータ（環境省生物多様性センター）を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害

衰弱したアカマツは台風などの気象害の影響を受けやすい。

獣害

担い手（管理）不足

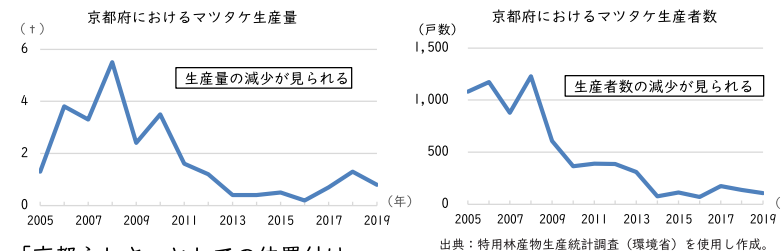
アカマツ林の維持管理不足で病虫害の影響から枯死木が増加している。

外来種

都市化



マツタケの生産量・生産者の推移



マツタケの生産には、アカマツ林が富栄養化しないように腐植層を掻き出したり、アカマツと競合する樹木を伐採したりするなどの山の手入れが欠かせず、維持管理がされていないアカマツ林の林床では、落葉に寄生する他の菌類が多くなり、マツタケが育ちにくい環境となるため、マツタケの生産量が減少する。生産量低下に伴い、生産者不足となり、それが維持管理不足へとつながる悪循環がある。

「京都らしさ」としての位置付け

指標種：マツタケ
ハビタット：アカマツ林



- ① 京料理等との関わりが深く、京都らしい食文化の伝統を継承していくには必要な生物資源。
- ② マツタケはアカマツ林とともに「京都らしさ」を支える生物資源。
- ③ アカマツ林というハビタットで保全再生を図りながら、アカマツ林管理ができる範囲で実施していくことが考えられる。



「京都らしさ」との関わり

祭事・伝統行事

祇園祭、白朮祭、書初め、花笠踊り、矢代田楽、山国隊軍楽、嵯峨お松明、鞍馬竹伐り会、広河原松上げ、久多宮の町松上げ、小塩の上げ松、小山の山の神、大原上野町のおこない・お弓 等

食

花見だんご、稚児餅 等

工芸品染織

京漆器、京扇子、京うちわ、京銘竹、京すだれ、京竹工芸、唐紙、きせる、京葛籠、京丸うちわ、京弓、京和傘、截金、尺八・竹楽器、提燈、矢、西陣織 等

建築

京町家 等

造園

庭園資材 等

生物資源の利用と調達状況の例



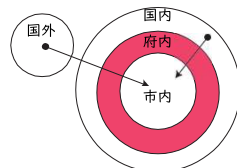
鞍馬竹伐り会

<現状>

- ・ 30年以上前は、寺の周辺で自生していたものを使っていたが、現在では近隣から購入している。

容易 やや難 困難 不明
—入手難易度—

●入手先



府内産（近隣地域）を利用



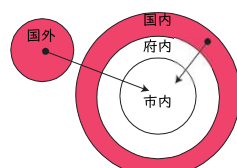
京扇子

<現状>

- ・ かつてはマダケを使っていたが、現在は採取できないため、国内産のモウソウチクを中心に使っている。

容易 やや難 困難 不明
—入手難易度—

●入手先



・ 国内産、海外産を利用



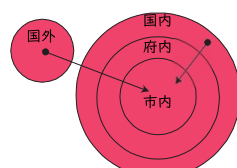
庭園資材

<現状>

- ・ 京都市ではマダケは採れないため、近隣で採取及び国内から購入をしている。モウソウチクは市内及び国内外のものを利用している。

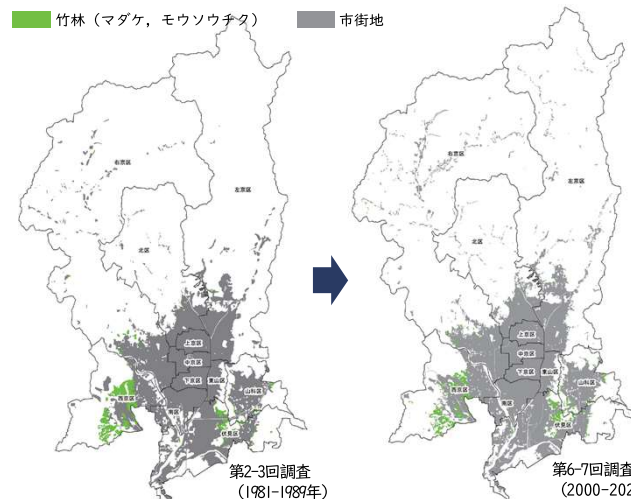
容易 やや難 困難 不明
—入手難易度—

●入手先

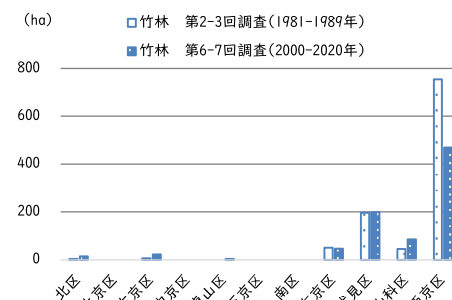


・ 府内産含め、国内産及び海外産を利用

分布（資源）量の推移



竹林面積の経年変化



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、西京区で特に竹林の分布が減少していることが分かる。一方で、市内全域の竹林の面積は大きくは減っておらず、山科区では、竹林面積が増加している。

出典：1/50,000及び1/25,000植生図「京都府」GISデータ(環境省生物多様性センター)を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害

枯竹などは台風などの気象害の影響を受けやすい。

獣害

イノシシ等獣害被害の増加。

担い手（管理）不足

竹林の維持管理不足から枯竹、倒竹が多く発生し、新しいタケノコの発生が少ない。

外来種

都市化

都市化の影響から分布面積が減少している。



環境の質の変化

竹林の林床は、上層を葉が密に覆うため暗く、一般的に林床植物は貧弱である。

古竹の伐採や落ち葉掻きなど林床植物に対する環境改善を行うと、出現種数が5倍になることが観察されている。

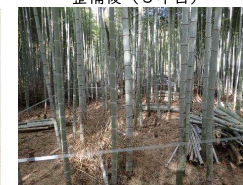
京都市北嵯峨地区の放棄竹林では、低木層の植被率は低く、また草本層の植被率は極めて低く、アラカシ、チャノキ、ヤブツバキ、サルトリイバラ、アオキ等がわずかに生育するのみであった。竹林経営を行うための本数調整として、景観林として利用することを目的に除伐を行ったところ、竹林内の光環境が改善され、希少種であるホンゴウソウ、シロジャクジョウの生育を確認したほか、新竹発生数も増加した。

整備前



※ 枯竹、倒竹多い。

整備後（3年目）



※ 希少種の確認

出典：北嵯峨地区の竹林再生活動において撮影。

「京都らしさ」としての位置付け

指標種：マダケ
モウソウチク
ハビタット：竹林



- ① 様々な構成要素（特に祭事・伝統行事、建築、造園）との関わりが深く、京都の伝統を継承していくには必要な生物資源。
- ② 竹は生物多様性としての価値とともに、「京都らしさ」を支える生物資源。
- ③ モウソウチク林に生育するタケノコ等の生物資源も含め、竹林というハビタットで保全再生を図り、竹林管理ができる範囲で実施していくと考えられる。



「京都らしさ」との関わり

祭事・
伝統行事

食

京料理 等

工芸品
染織

建築

造園

生物資源の利用と調達状況の例



京料理

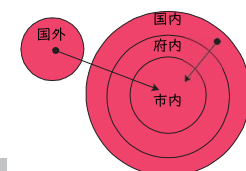
<現状>

- 管理不足の影響から、タケノコ収穫量が減少している。

容易 やや難 困難 不明

－入手難易度－

入手先



・京都産含め、国内外産を利用

タケノコの分布と生態

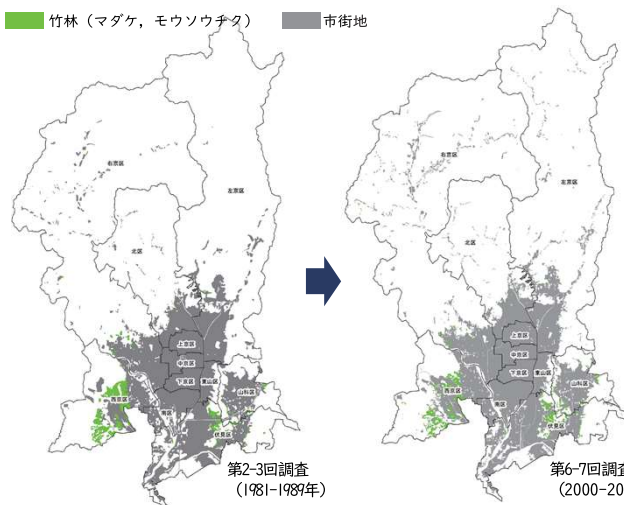
京都市はケッペンの気候区分において温帯性区分に位置しており、この区分ではモウソウチクは気温が10℃を超すと成長を開始して12℃で地上に頭を出し、マダケは16～24℃で地上に頭を出す。食用として代表的なタケノコは、モウソウチク、ホテイチク、ハチク、マダケなどがあるが、京だけのこのほとんどがモウソウチクである。

タケノコが伸びる速度は、モウソウチクでは1日に1.2mに達することもある。モウソウチクでは、竹材採取を目的にする場合の生育密度は1ha当たり6,000～7,000本に調整するが、タケノコ採取畑では春季にタケノコの発生を促すために地表温度が上がりやすくなるよう、地表面まで日光が十分に届くように、竹の生育密度を低く抑える必要があり、3,500～4,000本/haとしている。発生本数と管理を考えると、竹材採取地からタケノコ採取畑に転換するには、1ha当たり3,000本ほど伐採する必要がある。

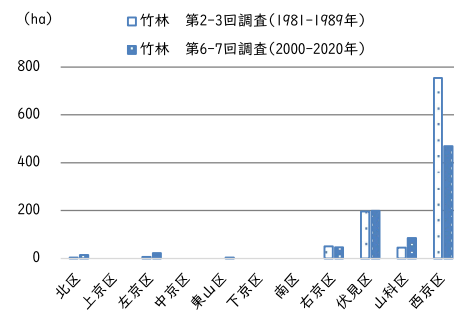
以上より、少なくとも100㎡当たり30本近く伐竹する必要が生じるため、放置竹林を整備し、タケノコ採取畑として維持するためにかかる労力の負担は大きいと考えられる。

分布（資源）量の推移

■ 竹林（マダケ、モウソウチク） ■ 市街地



竹林面積の経年変化



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、西京区で特に竹林の分布が減少していることが分かる。一方で、市内全域の竹林の面積は大きくは減っておらず、山科区では、竹林面積が増加している。

出典：1/50,000及び1/25,000植生図「京都府」GISデータ（環境省生物多様性センター）を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害

枯竹などは台風などの気象害の影響を受けやすい。

獣害

イノシシ等獣害被害の増加。

担い手（管理）不足

竹林の維持管理不足から枯竹、倒竹が多く発生し、新しいタケノコの発生が少ない。

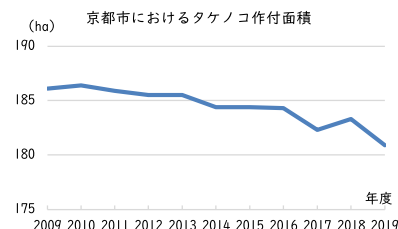
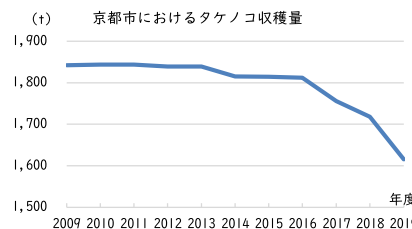
外来種

都市化

都市化の影響から分布面積が減少している。



タケノコ収穫量・作付面積の推移



京都市におけるタケノコの収穫量及び作付面積は、ともに減少している。

市内の竹林面積は大幅には減っていないことから、市内における放置竹林が増加しているものと推察される。

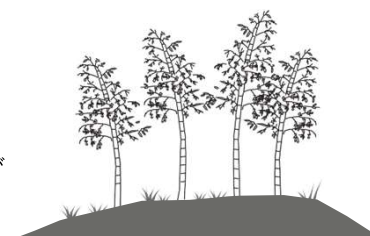
出典：農林統計(京都市)を使用し、作成。

「京都らしさ」としての位置付け

指標種：タケノコ
ハビタット：竹林



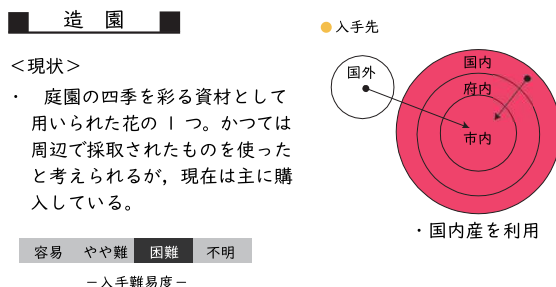
- 京料理等との関わりが深く、京都らしい食文化の伝統を継承していくには必要な生物資源。
- タケノコは竹とともに、「京都らしさ」を支える生物資源。
- 竹林というハビタットで保全再生を図りながら、竹林管理ができる範囲で実施していくことが考えられる。



「京都らしさ」との関わり



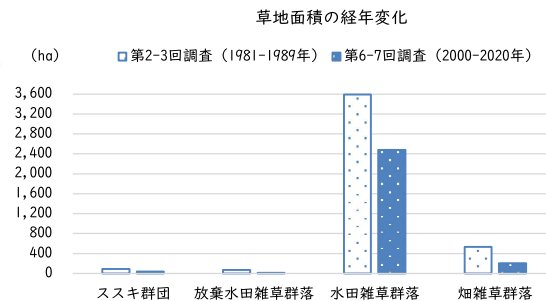
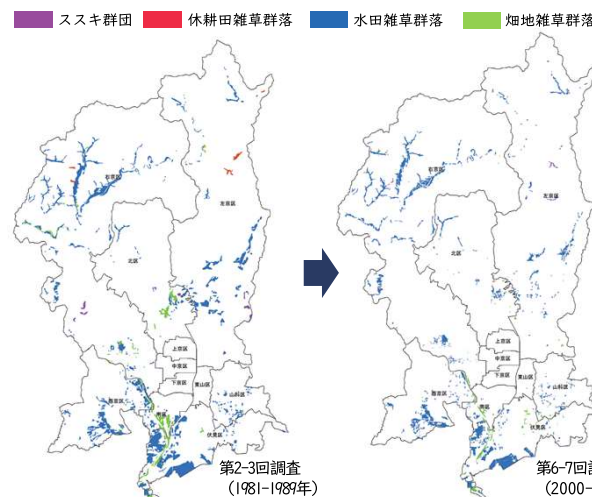
生物資源の利用と調達状況の例



キキョウの分布と生態

キキョウは山野の草地に生え、太い根茎は深く地中に入り、茎は高さ40-100cm、ときに上方が分枝する。花期は7-8月、茎頂近くに数個付き、花冠は直径3-5cm、花柄があり、青紫色であるが、淡紫色や白色のものもある。北海道～九州・奄美群島（諸島）、朝鮮半島・中国・ウスリー・アムールに分布する。観賞用としても栽培され、園芸品種も多い。根茎を水洗し、細根を取り除き乾燥したものが漢方の桔梗根で、薬用にされ、咳や痰を取り、気管支炎などに効くと言う。

分布（資源）量の推移



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、キキョウが生ずる草地環境（ススキ群落、放棄水田雑草群落、水田雑草群落、畑地雑草群落）と考えられる植生が大きく減少していることが分かる。

出典：1/50,000及び1/25,000植生図「京都府」GISデータ（環境省生物多様性センター）を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害
獣害
担い手（管理）不足
外来種
都市化

ニホンジカ等獣害被害の増加。
耕作地等含め、管理不足から放置化。
外来種が繁茂し、在来種の生育環境が悪化。

質の推移



京都市で見られる草地環境は、主に水田雑草群落と畑雑草群落である。しかし、耕作放棄地の増加による植生遷移などの生育環境の悪化が見られる。また、山に人の出入り（登山道・林道の利用や山の管理等）がなくなると、林床にコシダや常緑広葉樹の低木が繁茂して日照不足になり、草地性植物の生育が困難となる。

「京都らしさ」としての位置付け

指標種：キキョウ
ハビタット：草地



- ① 造園の資材等との関わりが深く、京都らしい庭園風景を継承していくには必要な生物資源。
- ② キキョウとともに、オケラ、ススキなど草地性の植物全般をハビタットして捉え、保全・再生を図ることが考えられる。
- ③ 市内の草地面積は少ないものの、草地植物の活用は、祭事・伝統行事（オケラ、フタバアオイなど）、造園（キキョウ、オミナエシなど）などの構成要素で使われてきた。



「京都らしさ」との関わり

祭事・
伝統行事

嵐山鵜飼、賀茂
別雷神社（神饌
（しんせん））等

食

川魚料理 等

工芸品
染織

建築

造園

生物資源の利用と調達状況の例

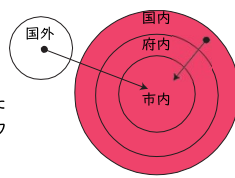


川魚料理

<現状>

・川魚料理はかつては食卓に
普通に見られる食材であった
が現在では河川改修、カワウ
や 外来魚などの影響により
減少している。

入手先



・国内産を利用

容易 やや難 困難 不明

－入手難易度－

アユの分布と生態

アユは、体長約20cm、北海道西部・本州・四国・九州、朝鮮半島～ベトナム北部・台湾に分布し、川の流れが比較的緩やかで、川底が礫で覆われる河川中流域や湖沼の岩盤や礫石底の瀬や淵に生息する。背はオリーブ色を帯び、成長に伴い体側前部に大きな黄色い斑紋が現れる。形、香、味、生息環境、独特の漁法などの点で申し分のない日本の代表的名魚。独特の風味があり塩焼きにして極めて美味、フライ、魚田、すし、うるかななどにもする。



出典：京都府（2021）京都府内水面漁業振興計画

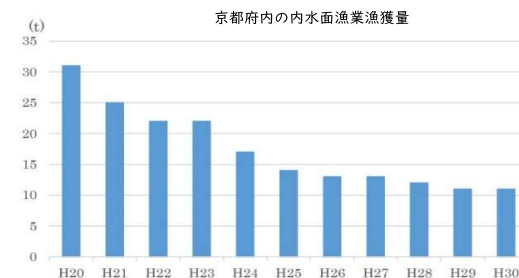
京都府下には、淀川水系と由良川水系の二大水系があり、水系によって生息する生物、漁業資源にそれぞれ特徴がある。

京都市内を流れる多くの河川が属する淀川水系の河川は、大阪府を流れ、大阪湾に流れ込む。上流はアマゴ、中流はアユ、中流から下流にはコイ、フナ、オイカワ等が生息しており、漁業資源として利用されている。また、アユモドキやイタセンパラ等の絶滅危惧種や、琵琶湖水系固有種が生息し、生物多様性が高いのが特徴である。

分布量の推移

内水面漁業漁獲量※（販売を目的として漁獲された量で、遊漁による採捕量は含まない）は、10年前と比べて約35%となっており、著しく減少している。減少の原因は、カワウや外来魚による食害、漁場環境の悪化、高齢化や過疎化による漁業者の減少等が考えられる。

※ 内水面漁業漁獲量：河川・池・沼の淡水における漁業

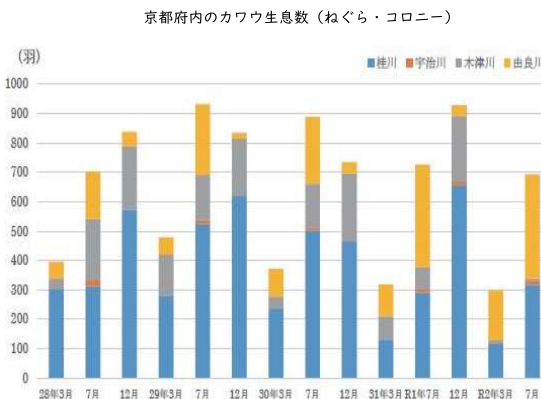


出典：京都府（2021）京都府内水面漁業振興計画

生息環境等の変化

淡水魚は海水魚と同様、古来より重要な食糧資源として利用されてきたが、近年、多くの種が減少傾向にあり、その原因は、護岸工事や川の直線化、池や水路の埋め立てによる生息環境の悪化と消失である。また、小魚を主な餌とするオオクチバスやコクチバス、ブルーギルといった外来魚が増えたことも、淡水魚の減少に拍車をかけている。

また、季節的に大きく変動があるが、京都府には300羽から1,000羽程度のカワウが生息している。カワウは魚食性の鳥で、1990年代から全国的に生息数が急増したことで内水面漁業に甚大な影響を与えている。



出典：京都府（2021）京都府内水面漁業振興計画

減少理由と課題の整理

気象害

獣害

担い手（管理）不足

外来種

都市化

カワウの増加による食害。

漁業従事者の減少。

外来種増加による生息環境の悪化。

河川改修工事等による生息環境の悪化。

「京都らしさ」としての位置付け

指標種：アユ
ハビタット：水辺



- ① 川魚料理等との関わりが深く、京都らしい食文化の伝統を継承していくには必要な生物資源。
- ② 市内の水環境で採れる川魚は古くから市民の郷土料理として親しまれてきた。
- ③ 河川改修工事等により、アユ等が遡上しにくい環境となっており、生息環境が悪化している。

